

『大無量寿経』における「難し」の思想（下）

——伝承の難・己証の難——

加 来 雄 之

Ⅲ 正宗分における「難し」

1 正宗分の内容と「難し」との関係

『大無量寿経』は、序分において仏説として示した伝承の難（難値難見）と己証の難（難量）という二つの「難し」という宗教的感覚を、正宗分においてどのように説き明かし、どのような宗教的自覚として成就していくのであろうか。正宗分の内容をこの二つの「難」と関係づけて簡単に押さえてみよう。

まず（無量寿経）の正宗分の特徴は、ジャータカ（本生譚）という物語の形式をもって展開していくところにある。ジャータカという文学形式をもって語る理由は二つあるように思う。一つは、ジャータカが特定の歴史的な出来事を隠喩（メタファー）を通して仏道の根本的な問題として深く受けとめるための説法の形式であることによる。つまり阿難のうえに起きている「聞仏説法」という出来事の実存的な深さを説き明かすために採用された言説方法という意味である。もう一つは、いわゆる過去の過去について物語る神話的な言説は、その出来事が歴史上の特定の個人にお

ける事件であることを超えて、すべての人びとが共有することのできる普遍的体験であることを示すための文学の形式であるからである。つまり阿難の「聞仏説法」という体験とそれについての問いが、阿難という個人の体験にとどまるものではなく、過去の人びとにとっても、未来の人びとにとっても、現在の私たちにとっても、宗教言説を聞くという体験を有する人であれば誰もが差別なく平等に問うべき課題であることを表現するためである。

さて憬興の『無量寿経述文贊』は、『大無量寿経』の正宗分を「初めに広く如来浄土の因果即ち所行所成を説く也。後に広く衆生往生の因果即ち所撰所益を顕す也⁽¹⁾」と大きく二つに分けて解釈している。親鸞も採用する適切な理解であると思うので、基本的にその理解を手がかりに正宗分がどのように「難し」という課題と呼応して展開しているかを尋ねてみよう。発起序において示された二つの「難」に照応すれば、次のように配当することができる。まず前半の「如来浄土の因果」は、諸仏・如来の言説が私たちのうえに実現しているという所与としての困難さ、つまり伝承の難を説き明かしている。そして後半の「衆生往生の因果」以後は、その諸仏・如来の説法を正しく聞くという課題としての困難さ、つまり己証の難を顕している。

2 如来浄土の因果

「広く如来浄土の因果」を説き明かすうち、「如来浄土の因」の核心となるのが法蔵という名の比丘もしくは菩薩の発願修行の物語である。法蔵という名が象徴する宗教的人格は、「聞仏説法」という経験の純粹な主体である。経験の純粹な主体とは、個人の諸属性をはなれ、経験中にまざる夾雑物を取り去った経験そのものの意である。といってもそれが一つの人格として物語られるとき、その人格は単に抽象的な観念ではなく、すべての聞法という経験に共通するもつとも具体的な生命をもった人格である。私たちは因位の法蔵の五劫思惟、発願、永劫修行という物語のうちに、聞法という経験が有する純粹さと歴史の深さを感じとる。法蔵が象徴する聞法する人格は、〈無量寿経〉が理

解する釈迦の因位であり、三世十方の一切の諸仏の因位であり、あらゆる求道者の因位であり、「今」というときにおける阿難の「聞法」という経験が有する深い因位としての意味を物語るのである。この意味で法蔵菩薩の発願修行の物語とは、諸仏を生み出す、もしくは諸仏を如来たらしめる因位の根本意欲を言い当てているのである。

次に「如来浄土の果」の核心は、法蔵の発願修行の成就として示されるところの、成仏して十劫を歴た阿弥陀仏とその国土の功德莊嚴である。如来と浄土との功德莊嚴は、如来の果位の智慧の世界がもつ清浄性と無量性と悲願性を隱喩を用いて視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という五感に訴えるイメージとして物語る。そのことよって阿難が「今」聞いている仏という存在の言説、つまり宗教言説を産み出し、またその言説が開く精神世界の広大さを象徴するのである。その隱喩を通して、私たちは仏の言説を聞くみずからを無限の智慧と慈悲のはたらきのなかに見出し、かつその無限の意味を分有する有限者として自己を理解する。まさに値遇し難きことに今すでに値遇しているという自己存在の深さを感じとるのである。如来浄土の果としての、阿弥陀仏とその安楽国の莊嚴は、私たちが出遇っている智慧の世界の甚深広大さをあらわすことよって「難し」という宗教的自覚に実質を与えるであろう。

では、この物語が神話的な時間をもつて語られる意味はどこにあるのだろうか。五劫思惟の摂取、兆載永劫の修行、成仏已來十劫を歴るといふ「五劫」「永劫」「十劫」といふ神話的な時間は、「難し」といふ宗教的感情に確かな内実を与える。「五劫の思惟」は、二百一十億の諸仏の世界を觀見し、本願を選び取るという内容である。そのことは「今」聞く仏の言説のうちに生死に埋没する衆生の課題に根本的に応えるためにさまざまな教えを本願に立つて取捨選択する営みがあることを教える。この仕事に深い感動をもつて教学を立てたのが源空の選択本願の仏教である。それは親鸞の「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば……たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」といふ感情に繋がっていくであろう。その「難し」「かたじけなさ」といふ気づきは、みずからの聞法を通して徹底して生きることの根源的な意味を選択思惟する人格を生み出してゆくであろう。

「兆載永劫の修行」は、私の言説が観念的な真理を語っているのではないことを示している。私の言説は、本願を担って、さまざまな時代社会を生きるものとして実験されてきた意味をもつのであり、それゆえにまた実験してゆく人格を生み出すことでなければならぬことを語っているのである。このいわゆる法蔵菩薩の永劫修行として隠喩される歴史精神に深い感動をもったのが善導と親鸞である。親鸞はこの感動にもとづいてみずからの信の内景を本願の至心信樂欲生として深く尋ねていくことになる（『教行信証』信巻、第二問答仏意釈）。

法蔵菩薩の本願とは、諸仏を生み出す因本の願を、また諸仏を諸仏たらしめている根本の願を言い当てるものとして理解することができる。⁽³⁾五劫と永劫という神話的な時間は、私たちが無数の宗教的人格、つまり諸仏たちのご苦労のなかにあることに目覚めさせ、それによって時代社会を見つめなおし、生きなおすものとするのである。

また阿弥陀仏の成仏が、阿難の「法蔵菩薩はすでに成仏し滅度したのか、まだ成仏していないのか、それとも今現にましますのか」という問いに答えて「成仏より已来、凡そ十劫を歴たまへり」と、「十劫」という時をもって語られるのは、阿弥陀仏のはたらきがすでに私たちを待ち続けていること、私たちの迷いの歴史に呼びかけ続けていることを象徴するのであろう。このような神話的な時としての内実をもつとき、「難値難見」という宗教的感情は単なる心理ではなく普遍的でありかつ歴史時代を担う宗教的真理の自覚となるのであろう。

3 衆生往生の因果

正宗分後半の「衆生往生の因果」は、私たちが如来の智慧の世界に生まれる方法とその意味を顕わすことで、その世界に生まれることの困難さ、つまり己証の難を示すのである。

「広く衆生往生の因果所撰所益を顕す」のうち、衆生往生の因は所撰、衆生往生の果は所益に配当できる。上巻を如来浄土の因果に配当することは問題がないが、この衆生往生の因と果とを下巻に配当する仕方はさまざまである。

ちなみに深励は、三十行偈の終わりまでを衆生往生の因、以下を衆生往生の果と位置づけている。ここでは一応それによって正宗分の後半の課題を確かめておきたい。

衆生往生の因果は、発起序において「如来其智難量」として示された已証の難の内実を顕らかにする。つまり如来浄土の因果において明らかにした「難値難見」の広大な世界を、迷いの衆生の心で願生すること、さらには往生することの困難さである。どのようにして、またどのような事実として衆生の往生が成り立つのか、このことに答えるのが衆生往生の因果である。

まず「衆生往生の因」の核心は、衆生が阿弥陀仏の浄土に往生する道を顕らかにすることである。衆生往生の因を「所撰」と表現するのは、往生が衆生の行為によってではなく如来の撰取によって成り立つからである。ここに如来の智が「難量」と示される本質がある。どのようにして如来は衆生をみずからの智の世界のうちに撰するのか、その問題をあきらかにするのが衆生往生の因ということである。

次に「衆生往生の果」は、往生によって衆生にどのような宗教的意味を実現するかを説き顕すことである。つまり第二十二願成就の菩薩功德や、釈迦の方便（応化身）として善悪（悲化段）や、仏智疑惑（智慧段）などの教えが与えられているという事実である。これらの教説は、「難し」の思想という視点からは、衆生が如来のはたらきのかにあるという深い意味を見出すための方便の教説として理解できる。

このように如来浄土の因果と衆生往生の因果とは、如来が衆生を救うはたらきとそれはたらきに衆生が出遇う困難さとを説くことができる。この如来浄土の因果と衆生往生の因果として展開する二つの「難」の確かめを通して、阿難は衣服を整え立ち上がり西に向かい合掌し五体を地に投げ、無量寿仏を礼拝する存在となる。そのことは阿難が今ここで釈迦仏の説法を聞いているという出来事に、阿弥陀如来に象徴される一切諸仏を超えた甚深広大な背景を見いだしたことを意味しているのである。このような因位と果位の物語を通して、はじめて阿難は諸仏如来とし

ての釈迦が称讃する無量寿仏を礼拝する存在となる。

ここにおいて阿難起ちて衣服を整え、身を正しくし面を西にして、恭敬し合掌し、五体を地に投げて、無量寿仏を礼したてまつり、白して言さく、「世尊、願はくは、彼の仏の安楽国土およびもろもろの菩薩・声聞大衆を見たてまつらん」と。……その時阿難、即ち無量寿仏を見たてまつるに、威徳巍巍として、須弥山王の高く一切のもろもろの世界の上に出づるがごとし。相好光明、照曜せざることなし。此の会の四衆、一時にことごとく見たてまつる。彼にして此の土を見ること、またまたかくのごとし。⁽⁵⁾

ここには、阿難の聞法という経験が、釈迦という歴史的偉人の言葉を聞くという「狭い意味での宗教」の経験に止まらず、その釈迦の言葉を通して阿弥陀という「広い意味の宗教」を理解したことが示されているのである。⁽⁶⁾とくに初期無量寿経では、ここで阿難をはじめとする聴衆たちが「南無阿弥陀三耶三仏檀と言ふ」⁽⁷⁾（『大阿弥陀経』）、「南無無量清浄平等覺と言ふ」⁽⁸⁾（『平等覺経』）と、阿弥陀仏の名号を称えることが示されている。

『大無量寿経』は引き続き、阿難と弥勒を呼び出し、広大な阿弥陀仏の世界に胎生する者を示し、さらに弥勒（慈氏菩薩）の「世尊、何の因、何の縁ありてか、かの国の人民、胎生化生なる」⁽⁹⁾という問いを受けて、胎生の因縁つまり仏智疑惑、罪福心の問題を説き明かしていくことになる。それは己証を困難ならしめている原因を仏智疑惑として示し、その生のあり方を胎生として私たちの意識の上に顕在化するためであると理解することができる。このように理解されることが許されるならば、弥勒を呼び出して説き始める胎化得失の教説は、聞法という経験に深く染みこんだ自力関心という疑惑心を刷りだし自覚させるという役割をもつのである。

このように『大無量寿経』の正宗分は、法蔵菩薩の發願修行の物語とその願成就の世界をもって、阿難の「聞仏説法」という経験の甚深広大な意味を説き明かしている。とすれば「本願真實」を説き示す教説は、釈迦の説く無数の教義のなかの一つではなく、教えを説くことと聞くこと、それ自体の意味を説き明かすという点において、他の教義

とは教えの質と次元とを異にするといわなくてはならない。親鸞がこの経を「出世の本意をあらわす經典とした意味がここにある。釈迦がみずからを諸仏如来の一として言明する。『大無量寿経』は、釈迦を歴史的一人格を超えて、去・来・現の諸仏如来の一として受けとめるための教説であり、教主釈尊という歴史的人格を生み出す背後の思想を本願真実として開顕する教説である。釈尊の教えを聞くという事実を受け止めることの困難さが序分では「難値難見」「難量」と示されたが、それに答えるかたちで正宗分の教説は展開しているのである。

序分	正宗分	
難値難見	如来浄土の因果	伝承の難
難量	衆生往生の因果	己証の難

ここで少し『大無量寿経』における三毒五悪段と呼ばれる教説の意義についても考えておきたい。この教説は、初期〈無量寿経〉の二本と『大無量寿経』にしか存在せず、他の諸本には存在しない。そのため〈無量寿経〉の本来の主題ではなく、他の經典などからの援引であるとされることがある。しかし私たちは三毒五悪段の内容に、〈無量寿経〉の伝統がもっていた人間社会の悲痛な現実についての関心の深さを見いだすことができる。三毒五悪段は、この濁世において「聞仏説法」ということがぜひとなくなてはならない切実な事由をあらわしている。

『大無量寿経』の主題を、「難し」に見るならば、その「難し」の究極は〈無量寿経〉のすべてに言及される仏智疑惑という己証を困難ならしめる課題の探求にあるといえる。しかし、三毒五悪段には、『大無量寿経』が生まれてくる現実が示され、三毒とそれを増強する思想によって生み出された人世のどうしようもない痛ましさへの眼差しがある。そして、そこにこそ仏によって我々に仏語によってたがいに「教誡」という道が与えられなくてはならなかった理由がある。仏説を聞きながら真実のあり方ができず、虚偽なるあり方をする私たちの痛い現実こそ、釈迦

によって「聞仏說法」の困難さが説き明かされなければならなかった理由であり、また「教誡」が懇切なかたちで示されなければならなかった理由であったからである。

4 正法難聞偈

『大無量寿経』正宗分において「難し」が直接的に取り上げられるのは、下巻に置かれる三十行偈の後半、いわゆる「正法難聞偈」である。⁽¹⁰⁾「正法難聞偈」十行四十句は、聞法できていることの宿縁の深さ、聞法すべき如来の智慧の深さと広さ、聞法の大いなる利益を示し、さらには聞法の精進を勧励する偈である。「正法難聞偈」の「難」の内容は、後に述べる流通分の弥勒付属の文と呼応しているが、流通分とは異なり、「難し」という自覚がより立体的に確かめられている。

多くの先学は、「正法難聞偈」十行の内容を三段に分けて確かめている。たとえば深励は、「正法難聞偈」の主題を「難信を挙げて讚勸する」とし、初めの三行を「初に宿善に約して難を明す」、次の四行を「二に仏智を嘆じて難を示す」、最後の三行を「三に總じて信受を結勸する」とそれぞれを「難」に関係させて理解している。私もこの分け方によって尋ねることにしよう。まず第一段の三行十二句は次のような内容である。

若し人善本無ければ此の経を聞くことを得ず 清浄に戒を有てる者乃し正法を聞くことを獲ん

曾更むしかつて世尊を見しもの則ち能く此の事を信ず 謙敬にして聞きて奉行し踊躍して大に歓喜す

憍慢と弊と懈怠とは以て此の法を信ずること難し 宿世に諸仏を見たてまつりしもの 楽みて是の如きの教を

聴かん⁽¹¹⁾

この三行は、聞法という出来事の困難さを、聞法する主体の側から明らかにしている。その特徴は、「難し」の内実を「曾更」「宿世」という神話的時間によってあらわしていることである。はじめに聞法する資格が、「善本」「有

戒」「見世尊」の三点で確かめられている。善本がなければこの経を聞くことはできなかった、清浄に戒をたもつものが正法を聞くことができる、かつて世尊に出遇ったからこの事実を信じていることができる。この確かめが次に「謙敬聞奉行」という聞法の態度を要請するのである。かつて世尊を見ることによって成り立つ出来事であるから「謙敬」という態度でなくてはならない。また「善本」という資格が「聞」という態度を、「有戒」という資格が「奉行」という態度を要請する。この聞法の態度が「踊躍大歡喜」という聞法の満足を実現する。またそのことは、「憍慢弊懈怠」という聞法における信の実現を困難とする態度への批判となる。「憍慢」は「謙敬」を阻害し、「弊」は覆われるという意味であるから「聞」という開かれたあり方を阻害し、「懈怠」は「奉行」を阻害するのである。このように聞法の資格と態度とを確かめることによって、聞法を宿世の因縁の成就として受け止めさせるのである。この「宿」という神話的時間に立てば、善本や有戒は単なる個人の業（行為）という意味にとどまることなく、如来浄土の因果において示された神話的時間（五劫、永劫、十劫）の時熟としてあるわが身の事実を受け止めるところに成り立つといえる。

次の第四行から第七行の四行十六句は次のような内容である。

声聞或は菩薩能く聖心を究むること莫し 譬へば生れて従り言ひたるもの行いて人を開導せんと欲はんが如し
如来の智慧海は深広にして涯底無し 二乗の測る所に非ず 唯仏のみ独り明かに了りたまへり

仮使ひ一切の人具足して皆道を得 淨慧本空を知り 億劫に仏智を思ひ

力を窮めて極めて講説して 寿を尽くすとも猶知らず 仏慧の辺際無きことを 是の如くして清浄に致る⁽¹²⁾

この四行は、聞法という出来事の困難さを聞法の対象である如来の側から明らかにしている。その特徴は、如来の智慧がどこまでも深く広いことを讃えて聞法の困難さを示すことにある。まず初めの第四行は、声聞や菩薩という聖者であっても仏の心を知り究めることはできないことを示す。第五行は、その理由が、如来の智慧海は深さに底がな

く広さに果てがなく、声聞や菩薩では測ることができず、ただ仏だけが明らかにささとっていることを示す。第六・七行は、どれほど有限な智慧を集め重ねても仏の智慧の辺際がないことと清浄の極致であることを知ることができないという。聞法の対象は如来の智慧（如来浄土の果）であり、有限な知恵と隔絶していること、そこに「難」と表現しなければならぬ理由があることを示すのである。『平等覚經』の偈文も『大無量壽經』にはほぼ一致するが、ただこの第二段の最後に「我が教を奉じて乃し是を信すること 唯此の人のみ能く解了す 仏の説きたまふ所皆能く受く是を則ち第一の証と為す¹³」と信を勧める一文が置かれている。

最後の第八行から第十行の三行は次のような内容である。

寿命甚だ得難く 仏世亦値ひ難し 人信慧有ること難し 若し聞かば精進して求めよ

法を聞きて能く忘れず 見て敬ひ得て大に慶ばば 則ち我が善き親友なり 是の故に当に意を發すべし

設ひ世界に満てらん火をも 必ず過ぎて要めて法を聞かば 会ず当に仏道を成りて 広く生死の流を濟（度）ふべし¹⁴

この三行は、前の聞法する主体の「難」と聞法の対象である如来の智慧の「難」をうけて、どこまでも聞法を徹底することを勧める。はじめの第八行には寿命と仏世と信慧についての三つの「難」をあげて、そのように「難」にもかわらず聞法できている以上は精進し求めよと勧める。とくにここでいう「信慧」とは対象的心理の信ではなく、やがて親鸞によって「信心の智慧」と確かめられるような信のあり方をいうのである。次の第九行は、聞法して忘れず、仏を見て敬い大いに慶ぶことができるならば、釈迦によって「我が善き親友」とされるのだから意を發すべきであると勧める。そして最後の第十行は、たとえ世界に満ちる火として隠喩される世の困難のなかにあっても、そのただなかでの聞法こそが、仏道を実現し、生死の迷いを度していくことになるであろうと勧めるのである。

これが正法難聞偈の内容である。第一段は衆生の側から、第二段は如来の側から、聞仏説法という出来事の「難

し」とされる理由を示し、第三段は「難し」という自覚をもって聞法の仏道を歩みつづけることを勧めている。この「正法難聞偈」には、「難量」という思想が聞法という事実を成就するための意義がよくまとめて示されている。

IV 流通分における「難し」

1 流通分の内容と「難し」との関係

『大無量寿経』の流通分において「難し」が出るのは次の文である。先人が「難を挙げて結勧する」⁽¹⁵⁾と位置づけるように、この文で釈尊の説法は終わり、以下は經典結集者の言葉となる。

仏、弥勒に語りたまはく。「如来の興世、値ひ難く見たてまつり難し。諸仏の経道、得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜、聞くこと得ること亦難し。善知識に遇ひ、法を聞き能く行ずること、此れ亦難しと為す。若し斯の経を聞きて、信樂受持すること、難の中の難、此に過ぎて難きは無けん。是の故に我が法、是の如く作しき、是の如く説く、是の如く教ふ、应当に信順して法の如く修行すべし」⁽¹⁶⁾。

この文は、釈尊が弥勒に対する付属として告げている。一読して分かるように、この文の内容は二つに分かれており、前半は難信を明かし、後半は如法の修行を勧めている。前半には、「難」の諸相が次表のように示されている。

『大無量寿経』流通分	慧遠・深励の科文
如来興世、難値難見。 諸仏経道、難得難聞。	見仏の難

菩薩勝法、諸波羅蜜、得聞亦難。

遇善知識、聞法能行、此亦為難。

若聞斯經、信樂受持、難中之難無過此難



この五種もしくは四種（慧遠の説）の難は並列ではなく、「如来興世難値難見」という「伝承の難」から「信樂受持、難中之難無過此難」という「己証の難」へと、「難し」という受け止め方がより主体的な方向へと深化していくプロセスが端的に示されている。最後の行の冒頭に置かれた「若聞斯經」の一句が値見という伝承の難から信樂という己証の難への転回点の役割を果している。ここで「難し」という自覚は「信樂受持すること、難の中の難、此に過ぎて難さは無けん」と「信樂受持」にきわまることが示されている。「信樂」とは第十八願に用いられた概念であり、「受持」とは受持読誦の意ではなく信受して忘れない意であるとされる。¹⁷ この信樂の難こそ發起序における「難値難見」「難量」という説示に対する結論である。釈迦は最後に聞法という体験を純粹に経験する核心が「信樂」にあることを改めて確認する。この信樂の難を内実とする信心歓喜においてこそ、如来の出世本懐に値うたこと、聞仏説法という出来事が満足するといえる。

このような内容を弥勒に付属することは、發起序の阿難の問いが阿難だけのものではなく、すでに發起序において釈迦によって予告されていたように、一切衆生を利益する問いとして、未来の一切衆生に流通されたことを示している。

阿難の仏の説法を聞くことの意味に対する問いを、この「信樂」の難にまでに導いた釈迦は最後に「是の故に我が法、是の如く作しき、是の如く説く、是の如く教ふ」と述べるのである。この文が仏説の結びになる。この三つの如

是の句についての解釈はさまざまであるが、釈迦がみずからの出世という一大事がどのような内実をもつものであるかを示すことができたことを確認していると受けとめることができる。

次に流通分の難の内容について『大無量寿経』と初期無量寿経との関係を見ておこう。初期無量寿経のこの文に相当する箇所はより一層、素朴なかたちで（無量寿経）の根本関心が師の教えをどのように受けとめるかにあったことを示している。『大阿弥陀経』と『平等覚経』との流通分を比較してみると次のようになる。

『大阿弥陀経』 卷下	『平等覚経』 卷四
<p>仏、言はく。「師は人を開導するに、耳目・智慧明達にして、人を度脱して善く泥洹の道に合ふことを得しむ。常に当に仏に孝慈すること父母の如くにすべし、常に当に師の恩を念ずべし。常に念じて絶えざれば即ち道を得ること疾からん。」</p> <p>仏、言わく。「天下に有せども甚だ値ひ難し。若し沙門有らば師の若くすべし。人の為に経を説く者甚だ値ひ難し。」</p> <p>〔大阿弥陀経〕 卷下、『真聖全』一・一八三頁</p>	<p>仏、言はく。「師は人を開導するに、耳目・智慧明達にして、人を度脱して善く泥洹の道に舍することを得しむ。常に当に仏に慈孝すること父母の如くにすべし、常に師の恩を念ずべし。常に念じて断絶せざるべし。則ち道を得ること疾からん。」</p> <p>仏、言わく。「天下に仏有せども甚だ値ふこと得ること難し。人、師法の経語を信受すること深きこと有る者は、又値ふことを得難し。若しは沙門 若しは師有りて、人の為に仏経を説く者にも、甚だ値ふことを得難し。」</p> <p>〔平等覚経〕 卷四、『真聖全』一・一三二頁</p>

（太字は両経で異なる字句を示し、網掛け部分は、『平等覚経』で増広された部分を示す。）

ここで注目されるのは、『平等覚経』で増加された網掛けをした部分である。つまり『大阿弥陀経』では師に値うことの困難さを示すのみであったが、『平等覚経』では師の教えを信受することの困難さが加えられている。さらに、『大阿弥陀経』から『平等覚経』へ、そして『無量寿経』へと流通分の「難」の表し方がどのような変遷するかを見よう。

『大阿弥陀経』巻下、	『平等覚経』巻四	『無量寿経』巻下
仏言師開導人耳目智慧明達度 脱人令得善舍泥洹之道常当孝 慈於仏父母常当念師恩常念不 絶即得道疾	仏言師開導人耳目智慧明達度 脱人令得善舍泥洹之道常当慈 孝於仏如父母常念師恩当念不 断絶則得道疾	仏語弥勒如来興世難値難見諸仏経 道難得難聞菩薩勝法諸波羅蜜得聞 亦難遇善知識聞法能行此亦為難若 聞斯经信樂受持難中之難無過此難
仏言天下有仏者甚難値若有沙 門若師為人説経者甚難値	仏言天下有仏者甚難得値人有 信受師法経語深者亦難得値若 有沙門若師為人説仏経者甚難 得値	是故我法如是作如是説如是教応当 信順如法修行

（「難」を太字で示した。網掛け部分は、『平等覚経』で増広された部分。）

『大阿弥陀経』では「値」の「難」のみが説かれていたのに対して、前述したように『平等覚経』では「値」の難に加えて「得」の難、「信受」の難があらわれてくる。これが『大無量寿経』においてはさらに難の内容が体系的に

整理され「信樂受持」の難に集約されていくことは、先の表をみれば瞭然であろう。この変化の根底に流れる関心は、師仏に導かれるという事実と仏に値う困難さの本質を「信」の困難さとして明らかにしていくという方向性である。その極みが『大無量寿経』の「難中之難無過此難」である。ここに〈無量寿経〉の「難し」という思想の課題は一応完成をみたといえる。ここに見出される方向性に潜在する力こそ、〈無量寿経〉を展開してきた課題力、つまり経典を生み出し、展開させてきた問いの力であったのである。

2 〈無量寿経〉の発起序と流通分―阿難の問い、弥勒の課題

経典結集者の構想の意図は、経典のどの部分に一番端的にあらわれるだろうか。たとえば劇作家が劇の場面・状況や登場人物の設定に、またその劇の結末に工夫を凝らすように、大乘経典の創作者と伝承者たちもまた、序分と流通分の構想に心を砕いたであろう。その経が説かれる状況の設定として問題提起を序分に、さらには流通分にその経説の結論を示そうとしたにちがいない。それゆえに経典の由来を経典そのもののうちに主体的に読みとろうとする人びとにとっては経典の序分と流通分とが重要な意味をもってきた。なぜならば序分は、仏陀の教説が説かれる現場（時間と空間と状況の中）へと私たちを連れて行き、私たちを会座の一人として、もしくは阿難その人として、その聞仏説法の場に立ち会うことができるようにするからである。そして流通分は、私たちがその経典を受け止めるときの核心を示すのであり、私たちは流通分においてこの仏説を聞いた一人としてみずからの主体的変革と応答責任のあり方を確認することができるからである。〈無量寿経〉での教説の基幹をなすのは正宗分であるが、経典の由来を決定するのは序分であり、経典の帰結を指し示すのは流通分である。

さて上述したように、〈無量寿経〉の発起序の基本的主題と構成とはほとんど変化しない。このことは〈無量寿経〉という経典における場面設定が〈無量寿経〉という経典にとって決定的な意味をもつことを語っている。読者は、

〈無量寿経〉の序分と正宗分とに説かれる内容がどのような関係にあるのかに留意する必要がある。序分の阿難と釈迦仏との問答に立ち帰って正宗分を理解しなければならぬということである。このような考え方は、私の独断ではない。親鸞は主著『教行信証』において真実教を『大無量寿経』として決定するときに発起序によっている。そして『浄土和讃』『大経意』においては発起序と流通分とをもつて『大無量寿経』の根底を流れる関心を端的に示している。また流通分は、〈無量寿経〉の諸本において表現に異なりはあるが、師の教えを聞きとることの困難さという主題はほぼ一貫しており、むしろその表現の変化は発起序の問いへの答え方が深まっていることのあらわれであるといえよう。

経典は固定したものではない、経典は成長し、展開し、変化する。しかしそれは経典が異質なものになることを意味しているのではない。そこには経を生み出し成長させ展開させる問いの力があつたはずである。私たちはその経典を經典たらしめるもの、經典のアイデンティティを維持する問いを見出さなくてはならない。その問いを見失うとき、經典は生命を失うのである。〈無量寿経〉においては、その問いが発起序における阿難の問いである。その問いへの応答が示されるのが流通分である。

どこまでも明らかにしようとする問いの力と、そのことだけは伝えなくてはならない核心を示そうという力、その二つの力を失ったとき、その経は新たな歴史を生み出すことができなくなるであろう。繰り返すが、經典を読むとき、序分の問い・流通分の付属が決定的に重要な理由はここにある。

おそらく〈無量寿経〉という名に象徴される課題をあらわす經典というテキストの成長の歴史は、ある時期にほぼ完結したのであろう。しかしその後、その經典を生み出した問いは、その聞法という経験における本質的な課題性によって終わることなく、その経を解釈する歴史として東アジアにおいて展開していくことになったといえよう。その歴史を推進した力が何に由来するのか。〈無量寿経〉という経がもつ問いの力とはどのようなものであつたのだら

うか。私たちは、その力を『大無量寿経』の発起序と流通分とにある「難し」という宗教的自覚の呼応に見出すことができるように思う。

『大無量寿経』は、発起序の阿難の問いに対して「難値難見」「難量」と「難し」を示す仏語よって始まり、流通分の「難し」という宗教的自覚の核心を「信樂受持」の「難中の難、此の難に過ぎたるは無し」という弥勒に付属する仏語よって閉じることになるのである。

『大無量寿経』の発起序と流通分における「難」の呼応

<p>発起序における釈迦仏の阿難への応答</p>	<p>流通分における釈迦仏の弥勒への付属</p>
<p>仏言、善哉阿難…… 如来以無蓋大悲、矜哀三界。所以出興於世、光闡道教、欲拯群萌惠以真寔之利。無量億劫、難値難見。猶靈瑞華時乃出。今所問者、多所饒益。開化一切、諸天人民。 阿難當知、如来正覺、其智難量、多所導御。惠見無碍、無能遏絶。</p>	<p>仏語弥勒。 如来興世、難値難見。 諸仏經道、難得難聞。 菩薩勝法、諸波羅蜜、得聞亦難。 遇善知識、聞法能行、此亦為難。 若聞斯經、信樂受持、難中之難。無過此難。</p>

(太字は「難」の思想に関わる表現を示す。)

おわりに

この雑駁な小論で試みたのは、〈無量寿経〉というテキストを生み出し、展開させた根底に流れる問題意識を『大

『無量寿経』というテキストの中からくみ出すということである。つまり『大無量寿経』の序分と流通分とにおいて仏説として示された「難し」という感覚こそ、〈無量寿経〉というテキスト群を生み出し、成長させ、また受容の歴史を生み出し、発展させてきた問題意識なのであろう。

阿難がいまだかつて出遇ったことのない釈迦仏の輝きに気づき、その仏としての根源を問う阿難の問いは、一応は、釈迦を仏たらしめている根源を確かめるものであるが、再応は、釈迦による問いの吟味によって露わになるように、仏に出遇い、その説法を聞いている自己(の事実)についての問いという意義を孕んでいるのである。なぜなら仏との出遇い(伝承)は、自明のことではなく、深い因縁として問い直されなければならず、出遇いはその因縁に対する自覚(己証)の獲得においてはじめて成就するからである。

このように〈無量寿経〉の根本的な課題を、仏の説法を聞くことができているという事実についての深い意味を聞き取ることにあることを確かめるならば、阿弥陀仏の本願も浄土も往生も胎生も、この「難し」という自覚を私たちに実現するために構想された象徴言語による壮大な物語を形成する概念群なのである。そして、時に応じてその深さや厳密さのために必要な思想や概念が般若経や華嚴経などの大乘経典から採用され、補強されていく、それこそ〈無量寿経〉がさまざまなバリエーションとして展開する理由であらう。

〈無量寿経〉が生まれてくる背景には、おそらく仏の説法を聞くことの深い意味を見失っている僧伽の現実があったのであろう。教義の観念的遊戯に陥り、仏法の値遇の感動を失い、仏弟子のもっとも根源的な体験の意味を見失った現実が僧伽にあったのであろう。濁世という痛ましい現実を担い、すべての人が本来性を回復する道を説こうとした釈迦を見失った教団、五逆・誹謗正法・一闍提を恵もうとした釈迦の歴史的社会的な意義を見失った僧伽があったのであろう。

このようにして釈迦は、序分において阿難の問いを絶讃し、その問いの内容を二つの困難さとして確かめ、正宗分

の本願とその成就についての教説を通して、如来との値遇が信の獲得によって成就することを確かめ、流通分において「信樂受持」の「難」と示すのである。

また本論文では取り上げなかったが、『大無量寿経』は、仏の説法を聞くことを「難し」と表現せざるをえない理由を「唯除五逆誹謗正法」「仏智疑惑」「信罪福心」などの仏の説法を聞く事実を疎外するさまざまな在り方を、私たちの意識の上に浮かび上がらせるのである。究極的には、仏との出遇いの困難さは信を獲得することの困難さである。仏の説法を聞くことの本質は信樂にある。真実の信樂を実現するために説かれたのが本願とその成就の教説である。換言すれば、真実の信心を獲得することができるならば、私たちはいつでも、どこでも、たとえ無仏の時であっても、経道滅尽の時であっても、如来の教えに出遇い、そのなかに生きることができるということを意味する。

このように『大無量寿経』の「難し」は、「聞仏説法」という遇い得ない出来事に遇い得ているのだという出来事の不思議さに対する感動を表現するとともに、なぜ出遇いながら出遇うことが完遂できないのかという矛盾のあり方を問う存在の感覚の表現として選ばれている。

『大無量寿経』の教説は、「難し」という一字を通して見返すとき、釈尊の八万四千の法門のなかの一教義や釈迦のさとりの内面を語ったのではなく、諸仏として五濁の世に釈迦を生み出す世界を如来の本願としてあらわし、仏の説法を聞くという出来事のかぎりなく深い意味を回復するための教であったといえよう。「聞仏説法」という体験を純粹に経験することは、釈尊とその教えを諸仏の法として仰ぐことであり、釈尊を生み出した阿弥陀如来としてあらわされる限りなく深く広い精神世界を見出すことによってはじめて可能となるのである。

【参考文献】

香月院深励『浄土三部経講義1 無量寿経講義』法蔵館。

安田理深『総序聴記』（『安田理深選集』第一五卷上。一九八四年、文栄堂。一九五九～六〇年講義録。

『教巻聴記』（『安田理深選集』第一五卷下、一九八五年、文栄堂。一九六〇～六二年講義録。

金子大榮『大無量寿経講話 上・下』コマ文庫、一九七〇年再版。

『大無量寿経聞思録』、『金子大榮著作集別巻二』、安居講録Ⅱ、春秋社、一九八五年。

曾我量深『大無量寿経聴記』、『曾我量深選集』第七卷、弥生書房。一九七三年夏安居講義録。

藤田宏達『梵文和訳無量寿経・阿弥陀経』法蔵館、一九七五年。

『浄土三部経の研究』岩波書店、二〇〇七年。

長谷正當『浄土とは何か 親鸞の思索と土における超越』二〇一〇年、法蔵館。

【キーワード】阿難の問い、弥勒への流通、難値難見、難信、信楽受持

註

(1) 『大正蔵』三七卷、一四七頁下、原漢文。ちなみに親鸞は行巻に引用している。

(2) 『歎異抄』、『真宗聖典』六四〇頁。

(3) 本願の本には因本と根本という二義があるとされる。

(4) 『真聖全』一・一五頁。

(5) 『真聖全』一・四二頁。

(6) 長谷正當『浄土とは何か』二三九～二四三頁を参照。

(7) 『真聖全』一・一七九～一八〇頁。

(8) 『真聖全』一・一二八頁。

(9) 『真聖全』一・四三頁。

(10) 周知のように、この「三十行偈」に相当する偈は、偈頌を有しない『大阿弥陀経』ではなく、『平等覚経』においてあらわ

れる。『平等覺経』は『大無量寿経』と同じく、「往觀偈」と「正法難聞偈」が一つになっている。また『如来会』では「阿逸多、仏出世難離八難身、亦難得諸仏如来無上之法…人亦難開示…堅固深信時亦難遭」などの後、「正法難聞偈」として流通分の直前に配置されている。また『莊嚴経』でも、仏世難値正法難聞などの言葉の後に「正法難聞偈」として流通分の直前に置かれている。サンスクリット本では流通分のあとに置かれている（藤田『梵本和訳 無量寿経・阿弥陀経』一五〇～一五二頁）。

(11) (12) (14) 『真聖全』一・二七頁。

(13) 『真聖全』一・一〇〇頁。

(15) 「無量寿経科文」一三〇、『真宗聖典』九八二頁。

(16) 『真聖全』一・四六頁。

(17) 深励『浄土三部経講義1 仏説無量寿経講義』八三三頁。